

# 領域の異なる多職種連携による在宅医療・介護連携推進事業 ～神経難病療養者が住みやすい浜松を創る～

代表者：河野 貴大（看護学部）  
分担者：吉本好延（リハビリテーション学部理学療法学科）  
連携機関：加納江理（静岡県立大学看護学部）  
赤石ゆかり、小出弘寿、松下太一（北斗わかば病院）

## 1. 背景

パーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症などの神経難病は進行性であり、神経変性をきたす神経の系統や支配する身体部位により様々な症状・障害を呈する。現在、病院の機能分化や在院日数の短縮などにより、神経難病療養者は在宅で過ごすことが主体となっている一方で、在宅療養を支援する訪問看護師は【難病への対応】や【患者の状態の正確なアセスメントや判断】、【介護サービスの調整を担うこと】などに不安や困難感、負担感を抱いていることが報告されている（曾根，2018）。

そこで、申請者らは2018年度より「神経難病支援者の会」を発足し、在宅療養者が病期に応じて必要な支援を受けることができるように、支援者のスキルアップを目的とした研修会や交流会の企画・運営を行っている。支援者の会のメンバーは、病院看護師や訪問看護師、理学療法士や作業療法士、社会福祉士、薬剤師など多施設・多職種の専門家で構成されており、隔月会議を行い、神経難病療養者の在宅支援について情報共有や課題の抽出を行っている。2021年度の会議では、浜松市における神経難病療養者の在宅ケアにおける課題として①神経難病の病態や治療について学修する機会が少ない、②進行する難病に対して支援のタイミングを判断することが難しい、③困った時、誰に相談すれば良いか分からない、という3つが挙げられた。これらは先行研究とも合致する状況であり、重点的な対策を講じる必要があると考えられた。

## 2. 目的

本事業の目的は、地域の神経難病療養者に対する在宅ケアの質を向上し、療養者と家族が安心して地域で暮らせるようになることである。2022年度は以下2つを目標とした。

- 1) 神経難病療養者の在宅療養に携わる支援者の知識・技術の向上
- 2) 神経難病療養者の支援に関わる多職種間の「相談しやすい関係づくり」の推進

## 3. 方法・実施内容

神経難病療養者を支えるネットワーク作りのための多職種交流を兼ね、病期に応じた医療・在宅サービスや福祉用具・機器についての理解を深めるための研修会を4回開催した。各研修会終了後には研修会の質向上を目的にWEB上で回答する任意のアンケートを実施した。また、研修会の企画・運営や地域の課題に関する情報共有のため、専門職による会議を隔月開催した。

### ①神経難病療養者とのコミュニケーションに関する研修会

日時：2022年10月8日（土）13：30～17：00

場所：北斗わかば病院 南棟2階リハビリテーション室

対象：在宅領域を中心に医療・介護・福祉に関わるすべての職種

講師：NPO法人 ICT救助隊

内容：ICTを活用したコミュニケーション支援に関する講義の後、研修会の参加者を4グループに分け、4つのブース（透明文字盤の体験、視線入力装置の操作体験、オリジナル入力スイッチの体験、iPadを活用した入力体験）をそれぞれ30分ずつ体験した。

## ②介護福祉士、訪問介護員を対象とした透明文字盤に関する研修会

日時：2023年2月10日（金）17：30～18：30

場所：ヘルパーステーションやわらぎ（野の花棟4階）

対象：介護福祉士、訪問介護員

講師：北斗わかば病院 言語聴覚士

内容：講師による講義の後、参加者同士で透明文字盤を体験した。

## ③ALS療養者の呼吸リハビリテーションに関する研修会

日時：2023年2月11日（土）17：30～18：30

場所：聖隷研修センター2階研修室

対象：訪問看護ステーションに勤務する専門職者

講師：北斗わかば病院 理学療法士

内容：ALSの概要やリハビリテーションに関する講義の後、実際にベッド上で呼吸の評価や介助、排痰介助の実技を行った。

## ④ケアマネジャーを対象とした透明文字盤に関する研修会

日時：2023年2月17日（金）13：30～14：30

場所：地域包括支援センター和地

対象：ケアマネジャー

講師：北斗わかば病院 言語聴覚士

内容：講師による講義の後、参加者同士で透明文字盤を体験した。

## 4. 結果・実施後の評価

### ①神経難病療養者とのコミュニケーションに関する研修会

参加者は41名で、職種は看護師、理学療法士、作業療法士、社会福祉士、ケアマネジャー、学生等であった（表1）。研修会後のアンケートでは、有意義な時間であったかという問いに対し回答のあった37名のうち「大変良かった」と回答した者が31名（83.8%）であった。自由記載では、「コミュニケーションツールを使用したことがなかったため非常に勉強になった」や「実際に機器に触れ、操作の大変さが理解できた」、「慣れたらとても便利なものになると感じたが、慣れるまでの期間は利用者さんにとってとてもストレスになると思った」等の意見が聞かれた。また、今後の要望として、「ICT機器を導入するまでの具体的な流れが知りたい」や「導入後のフォローアップ体制について教えてほしい」等の意見があった。

表1. ①研修会参加者の職種

職種	人数(n=41)
看護師	15
理学療法士	3
作業療法士	3
ケアマネジャー	9
社会福祉士	4
介護福祉士	1
相談支援専門員	1
薬剤師	1
学生	4



ICT救助隊による講義



透明文字盤の体験



視線入力装置の操作体験

## ②介護福祉士、訪問介護員を対象とした透明文字盤に関する研修会

参加者は11名であった。実施後のアンケートでは有意義な時間であったかという問いに対し、回答のあった8名のうち「大変良かった」と回答している者が5名(62.5%)、「良かった」と回答している者が3名(37.5%)であった。自由記載では「初めて透明文字盤を体験出来てとてもよかった」や「患者さんの視線に合わせて文字盤を動かすのは難しかった」、「透明文字盤を挟んでいても、お互いに視線を合わせることで言葉以外の感情も伝え合える気がした」等の意見が聞かれた。今後の要望として、「視覚障害の方や肢体不自由な方などの援助の仕方を教えてほしい」、「難病の方への支援など、専門職からの研修の機会をもっと設けてほしい」等の意見が聞かれた。



言語聴覚士による講義



透明文字盤の体験

## ③ALS療養者の呼吸リハビリテーションに関する研修会

参加者は23名(看護師13名、理学療法士または作業療法士10名)であった。実施後のアンケートでは有意義な時間であったかという問いに対し、回答のあった20名のうち「大変良かった」と回答している者が17名(85%)、「良かった」と回答している者が3名(15%)であった。自由記載では「実技と講義を交互でしてくれてとても良かった」や「実際に呼吸介助をする現場があった中で自分が正しくできているか確認できてよかった」、「普段これでいいのかと悩みながら実施していたことが明確になり、とても有意義だった」等の意見が聞かれた。また、「神経難病の方への支援のアプローチについて、難しい事や不明点などあれば、いつでも相談して良いと言ってくださったので、ありがたい」という意見もあった。今後の要望として、「呼吸筋のストレッチや体位ドレナージ、スクイーミングについても実技指導してほしい」、「定期的に実技研修してほしい」といった意見が聞かれた。



理学療法士による講義



実技指導

## ④ケアマネジャーを対象とした透明文字盤に関する研修会

参加者は12名であった。実施後のアンケートの自由記載では「透明文字盤を実体験する事で理解が深まった」、「コミュニケーションが取れないことのつらさがわかった」等の意見が聞かれた。



言語聴覚士による講義



透明文字盤の体験

上記研修会以外に、専門職による会議を2022年度内で計6回（4月、6月、8月、9月、11月、2月）実施した。会議のメンバーは病院看護師や訪問看護師、理学療法士や作業療法士、社会福祉士、薬剤師、大学教員等であり、研修会の企画・調整を行うとともに地域の課題の共有を行った。会議では、個別に相談される件数が増えたことが挙げられ、残された地域の課題として神経難病患者のコミュニケーション機器に実際に触れる機会が少ないこと、支援者がALS療養者の呼吸リハビリテーションに困難感があること、在宅において適切な栄養管理や食事指導が困難なこと等が挙げられた。

## 5. 考察および今後の課題

2022年度に実施した4つの研修会では、いずれも参加者の満足度は高く、有意義な時間であったと回答している参加者が多かった。特にコミュニケーション機器に関する研修会では実際に機器に触れ、体験する機会を得られたことで療養者に対する理解につながったという意見が多く聞かれた。コミュニケーション機器は病院で導入されることが多い一方で、実際に活用する場は在宅であり、訪問看護師やケアマネジャー等の在宅療養を支援する専門職が機器の扱い方や困難さ、注意点等を体験しながら学ぶことのできる研修会の開催は非常に効果的であったと考えられる。研修会は実際に透明文字盤や視線入力装置を体験していくため、多人数での実施は難しく、今回の研修会においても参加を希望していたが申し込むことができなかつた者もいた。今後も継続的に研修会を企画・開催し、在宅療養に携わる支援者の知識・技術の向上を図ることが重要である。

呼吸リハビリテーションに関する研修会では、「いつでも相談して良いと言ってくださったので、ありがたい」といった意見も聞かれ、研修会での交流が困ったときの相談先として顔の見える関係づくりにも効果があったと考えられる。専門職による会議においても研修会をとおして個別に相談される件数が増えた、地域のつながりが密接になってきた、といった意見も聞かれ、今後も事業を継続することで神経難病療養者を支えるネットワークの構築につながることが期待できる。

以上のことから、2022年度の目標は概ね達成できた。多施設・多職種の専門家が組織的に連携して、神経難病療養者の支援者を継続的に支援する取り組みは全国的にも数少ない。本事業が全国のモデル事業となれば、多くの療養者に『在宅生活の継続』という選択肢を増やすことができ、地域包括ケアシステムの構築に大きく貢献できると考える。そのため、今後も事業を継続し、地域の神経難病療養者に対する在宅ケアの質向上を目指す。